九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

アンドレ・アブー『行間のアルベール・カミュ』

安藤, 智子
九州大学大学院人文科学府博士後期課程

https://doi.org/10.15017/18948

出版情報：Stella. 29, pp.107-110, 2010-12-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

アンドレ・アブー『行間のアルベール・カミュ』

安　藤　智　子

自動車事故による突然の死から50年――。カミュ研究は今やかつてない盛り上がりを見せている。2006年から3カ年にわたりプレイアッド新版全4巻が刊行されるいっぽうで，ジャンイヴ・ゲラン編纂『アルベール・カミュ事典』[1)] を始めとする重要な研究書の出版が相次いでいる。本書『行間のアルベール・カミュ』[2)] もそうした一書に数えられる。著者アンドレ・アブーはこれまで『異邦人』などの初期作品を対象にした研究で功績をあげてきたが，新著では副題「1955-59年――文学との訣別か，見せかけの退場か」が示すように，カミュ晩年の5年間を俎上に載せている。本書でのアプローチそのものは作品の生成過程に光を当てつつ，テクストの言語学的・意味論的分析を試みており，これまでと大差はない。また目次の割愛に端的に窺えるように，論述全体の構成がやや粗雑で，議論の展開に拙速の感がある。根拠が曖昧な論述や同一内容の繰り返しも散見し，熟慮にもとづく筆の運びとは言い難い。さりながら，親交のあった故カミュ夫人の恩恵に与り，作家の自筆原稿や蔵書など貴重な新資料を渉猟・活用している点は特筆に値するメリットである。以下に著者の主張を概観しよう。

本書は不均衡ながらも6つの章からなる。はじめに「1955年のジャーナリズム復帰」についての章。次に『転落』の分析で，これは付録も含めて全体の半分以上を占める大部な章である。これに続くのは，カミュにおける文学召命の変遷をたどる2章と，未完の作品『最初の人間』理解を問い直す論考であり，最後はカミュの現代性を論じる章で締めくくられる。カミュの晩年を論じながら著者が一貫して主張するのは，それが作家にとって真に危機的な時期だったことである。まず1952年のサルトルとの論争は周知だが，翌年には妻の病により夫婦の危機が訪れる。これが発端となってカミュ自身も1954年に精神的な危機に陥り，創作活動は著しく停滞してしまう。かかる文脈を踏まえるならば，

作家がその翌年にジャーナリズムに復帰するのは，当時の政治状況よりむしろ，社会性を回復し孤独を脱したいという願いに求められよう。いわば共同制作に対する幻想だが，この試みは1年余りで破綻する。おそらくは期待と現実の齟齬が原因であった。

当時のカミュにとって文学創作こそは脅威であり，精神の平衡を取り戻すためには転向が必要だった。さすれば彼がおもに1955年に執筆した『転落』は，文学にいったん距離を置くための作品にほかならない。アブーはこの小説を従来のように言語に対する異議申し立てとしてではなく，文学に対するそれとして読み解く。そもそも諧謔と揶揄に満ちたクラマンスの語りは，作品が小説創造の舞台裏を明かす寓話として構想されたことを示している。それは現実的な虚構の構築よりも，むしろ摩滅を志向しており，物語というよりも演劇的フィクションあるいはコントに位置づけられる。こうして『転落』は，文学を非神聖化するために作家がみずから捧げた生贄となったのである。

では1956年に『転落』を，続いて翌年に短編集『追放と王国』をものしたカミュはどこへ向かうのか。アブーによれば，ノーベル賞受賞直後の57年末から再び作家を襲った精神的危機は決定的であった。事態は回復どころか悪化していたのである。精神科医による治療を受けるなか，文学との完全な訣別が求められたことが当時の『手帖』の記述に窺い知れる。残された道は演劇界への転身しかなかった。それは一時的な逃避ではなく，生きる場を求めての全的なアンガージュマンだったのである。事故によって命を絶たれなければ，カミュは新しい劇場の総監督に就任していたはずであった。

他方で，カミュが『転落』よりも先に構想した『最初の人間』だけは執筆を続けたことも事実である。アブーの推測するところ，それはこの自伝的小説が幼少期に受けた心の傷を癒すという目的をもつためである。あるいはまた，すでに着手した作品を完成させることで，危機の克服を確認したいという思いもあったはずだ。しかし長すぎる懐胎の時を経て，物語はすでに拡散しかけていた。さらに時間を費やして作品を完成したとしても，それは我々のもとに遺されたテクストとはまるで別様になったのではあるまいか――ちょうど『幸福な死』の灰燼から生まれた『異邦人』が，物語の筋やテーマ，文体において変貌を遂げたように[3)]。

以上が本書の概要である。けっして綿密な考究とはいえないが，カミュの後

期作品にかんする通説に一石を投じる内容も具えている。まず『転落』については，同年に発表された翻案劇『尼僧への鎮魂歌』との相互関係が論じられている点が興味深い。物語の演劇性や時間性の分析も作品理解の一助となろう。とりわけ生成過程については，自筆原稿の見取り図を示すような筆致で，細部に明るく，随所に未刊行の情報も盛り込まれており注目に値する。一例を挙げるならば，タイプ稿のある段階で加筆された草稿（個人蔵）から引いた末尾はまさに注目に値する。『異邦人』や『誤解』の結末との類似が顕著だからである。また『転落』後のカミュの歩みについていえば，1957 年末から翌年にかけての精神的危機を重視するアブーの論考は我々に再考を促さずにはいない。従来は，『最初の人間』の遺稿が 1994 年に出版されたのを境に，晩年のカミュの創作活動を不毛ではなく豊穣と捉えるのが大勢となっていた。著者の主張はこれに異を唱え，『最初の人間』にかんする過度な称賛を批判するものである。

ともあれアブーの論述が一方的に過ぎる面があることもまた否定し難い。「精神科医による治療，すなわち文学放棄の決意」という図式に固執するきらいがあり，しかもその根拠は『手帖』のごく一部の記述にのみ基づいている。この点についてこそ実証研究の手腕が発揮されるべきだったのではないか。同時期の『手帖』の記述に彼の主張とは矛盾する内容があることを考え合わせても，後期のカミュの実像が総体的に論証されたとは言い難い。あるいは著者の着想は原型のまま我々に委ねられ，発展させられる日を待っているのだろうか。

最後に標題について――。「行間の」と訳出した表現は，字義どおりには「（複数の）線の間」という意味だが，もちろん両義性を意識しての使用だろう。後期作品を論じてその行間に作家の真の姿を読みとろうとしながら，アブーは文学への没入と放棄のあいだで葛藤するカミュを見いだすからである。文学者としての自覚と精神的危機の狭間で，作家が選んだのは訣別だったのか，あるいは回帰のための一時的な離別だったのか。問いは開かれたままである。

註

1）*Dictionnaire Albert Camus*, sous la direction de Jeanyves Guérin, Paris : Éd. Robert Laffont, coll. « Bouquins », 2009, XIV-975 pp.

2）André ABBOU, *Albert Camus, entre les lignes. 1955-1959 : Adieu à la literature ou fausse sortie ?*, Biarritz / Paris : Atlantica-Séguier, 2009, 196 pp.

3）『幸福な死』の延長線上に『異邦人』を位置づけることには異論もある。両者はもともと別の物語として構想されたというのである。